

使徒の働き18章9-10節 「恐れるな、語り続けなさい」

### 1A コリントにおける難しさ

1B 町の不品行

2B ユダヤ人の反対

### 2A 夜の幻に現れた主

1B 「恐れるな」

2B 「黙ってはいけない」

3B 「わたしが共にいる」

4B 「わたしの民がたくさんいる」

## 本文

使徒の働き 18 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、先週で 17 章まで来ました。今日は午後礼拝で 18 章全体を一節ずつ見て行きたいと思います。今朝は、9-10 節に注目します。  
「<sup>9</sup>ある夜、主は幻によってパウロに言われた。「恐れないで、語り続けなさい。黙ってはいけない。  
<sup>10</sup>わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」恐れて、弱くなっていたパウロに対して、主が現れてくださいました。そして、恐れないで語り続けなさい、わたしの民がこの町には大勢いるからと励ましてくださいます。

私たちは、初めから困難があると分かっていると、どうしても安全なほうを選んでしまいます。そもそも、何かをやらなければ、いろいろないざこざから免れるということです。けれども、イエス様が私たちに召された神の御国は、結局は世とは相いれないものであり、必ず反対や困難が来ます。山上の垂訓の、幸いな者の宣言を思い出してください。初めに、心の貧しい者は幸いです、から始まるのです！自分には何も無い乞食のようなものなのだ、神の前では自分は災いだという絶望から始まると幸いなのだ、と言っているのですから。そして、悲しむ者は幸いです、へりくだった者は幸いです。それから、義に飢え渴く者は幸いですと行きます。義に飢え渴いたら、厄介なことになります。周りは不義に満ちているからです。そして、憐れむ者は幸いです。心の清いものは幸いです。平和を造る者は幸いです、であります。対立する両者を和解させる働きほど、辛いものはありません。そして、「義のために迫害される者は幸いです」なのです。これが、キリストの弟子に召された者の生活の特徴なのです。

ですから、多くの人が危険を避ける、リスクを回避することこそが生きる知恵だと思っていますが、キリスト者には必ず危険が付き物です。パウロの宣教は、初めからずっと反対続きでした。それで恐れ震えていました。けれども、そういう時にこそ、主が現れてくださいます。

## 1A コリントにおける難しさ

### 1B 町の不品行

パウロはアテネにいましたが、次にコリントに来ました。アテネから約 80 キロメートル西にある町です。アテネは哲学者らがいたところですが、コリントはまるで性格が違います。やりたい放題、道徳的に乱れていた町です。非常に大きな町で、当時の人口は 60 万人いたのではないかとされています。

コリントの町の特徴は、それが、地峡と呼ばれるところにあることです。地図をご覧ください、ギリシアは、南はペロポネソスという半島になっています。半島といっても、ほとんど島のようになっていて、というのは、非常に細長い陸地でわずかにつながっていたからです。東がエーゲ海、西がイオニア海に挟まれていて、その幅はわずか 6 キロメートルです。

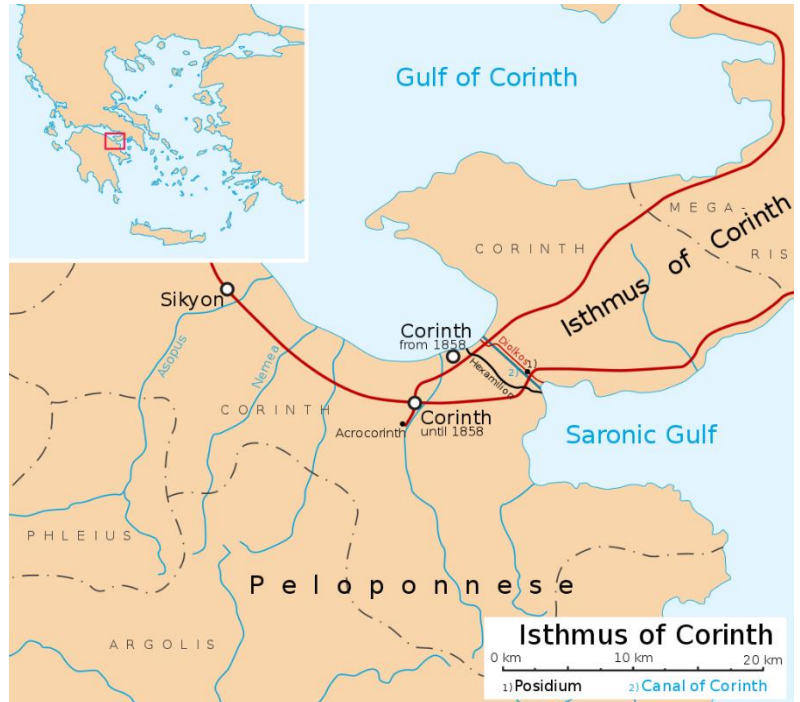
そこで東から西、西から東の貿易が、西にローマがあるので盛んにおこなわれていましたが、ペロポネソス半島を大きく迂回せずに、この地峡で陸揚げして

運搬することによって、400 キロメートルも短縮できるので、行いました。運河の計画は、ローマ時代もありましたが断念。今は、19 世紀の終わりにできあがった運河があり、コリントス運河と呼ばれます。

そこで、ローマ時代にその貿易で大いに栄えて、アカイア州の首都になりました。水夫たちが、ここに来ると思う存分遊ぶところなり、その相手をする女たちがいた、ということにあります。それが、偶像礼拝と密接につながっていました。アクロコリントスというアクロポリス、山があって、その山頂に、女神アフロディーテの神殿がありました。アフロディーテは、愛、美、性の神で、カナンのアシュタロテにあたります。女祭司たちが 1000 人もいましたが、売春婦です。売春して儲けを神殿の運営にあてがっていました。「コリント化する」という言葉が当時使われていて、「道徳的に退廃する」という意味を表していました。劇場で、コリント人が出て来ると、泥酔する人間として演じられていました。そういう中で、宣教の働きをするということです。

## 2B ユダヤ人の反対

それでもパウロは、ユダヤ人に会堂に行って論じ、イエスがキリストであることを証しました。けれども、彼らが反抗して口汚く罵りました。彼は、宣教が始めてから、この連続です！ピリピの町では鞭打たれるし、テサロニケでは、彼らが妬んで、群衆を扇情し、パウロとシラスは逃げなければ



ならず、ベレアに行ったら、テサロニケからのユダヤ人がやって来て、また煽り立てました。町は、風紀が乱れているし、ユダヤ教会堂に入れば、口汚く罵られました。

## 2A 夜の幻に現れた主

そこで主が夜の幻に現れてくださったのです。これまでも何度か話しました、主は、私たちにとってトンネルの中に入ったような暗闇にいる時に、最もはっきりと語ってくださいます。

パウロが、夜に主が現れてくださった時は、いつも追い詰められていた時でした。トロアスにいた時に、夜に夢の中で、マケドニア人が助けを呼びました。どこに行っても、御霊が禁じるので、しかたがなしに、そうではないところに行っただけです。そして、これからの話になりますが、エルサレムに彼が行って、そこで、ユダヤ人たちに証しをしたのに、彼らが途中で騒ぎ立て、ローマの千人隊長が無理やりパウロをその群衆から引き出して、カイサリアの牢屋に入ることになりました。「23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならない」と言われた。」夜に、励ましたのです。彼が、長いこと立てていた計画が、水の泡で消えていくような失意にいた時に、夜に現れてくださったのです。さらに、カイサリアから船に乗せられて、ローマに行く途中で、その船が暴風の中に入ってしまった。太陽も星も見えない日が何日も続き、もはや助かる望みが完全に断たれたような時でした。しかし、パウロが語り始めたのです。同乗していた人々にこう言いました。「27:23-24 昨夜、私の主で、私が仕えている神の御使いが私のそばに立って、こう言ったのです。『恐れることはありません、パウロよ。あなたは必ずカエサルの前に立ちます。見なさい。神は同船している人たちを、みなあなたに与えておられます。』」

どうでしょうか、みなさんにも「夜」の時がないでしょうか？そういう時に、一気に先が見えてくるような、主の語りかけがあるのです。

## 1B 「恐れるな」

主は、「**恐れなくて**」と言われました。恐れなくていなさい、と言われたということは、彼は恐れていたのです。これだけの迫害を受け、パウロの心にはトラウマが残っていたことは確実です。コリント人への手紙第一で、自分がどのような状態だったかを述懐しています。「2:3 **あなたがたのところに行ったときの私は、弱く、恐れおののいていました。**」弱く、恐れおののいていたのです。みなさんに、そういう体験ありますか？意識としては、しっかりしているのですが、極度のストレスで、体に出てきているということをおそらく、パウロはそうだったのだと思います。私たちはとかく、聖書に出て来る人物を、超人だと思ってしまうことがあります。けれども、私たちと全く同じ人間だったのです。

けれども、それにも拘らず、彼は福音を語っていたのです。ここが大事です。続けて彼はこう言

っています。「2:4 そして、私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。」彼は、心は、恐れおののいていたにも関わらず、それでも語ったのです。その時に、人々が主を信じて行きました。つまり、彼の説得力のある言葉でもなく、知恵のことばでもなかったのです。むしろ、弱々しさが目立つような話し方だったかもしれません。ここが大事です。私たちは自分の気持ちや感情を大事にしすぎです。気分が良いと、主が平安を与えておられるといい、悪いと、自分は主から離れているとします。神は私たちに、喜怒哀楽という感情を与えてくださっています。主に従うというのは、その感情の起伏の中にあって、その動きがあっても、それでも御心を行っていくということなのです。

### 2B 「黙ってはいけない」

そしてイエス様は、「語り続けなさい。黙ってはいけない。」と言われました。語れば、騒動が起こり、口汚く罵られる…。そう思って、もう黙っていいようか？とも思っていたのかもしれませんが。口数を減らせば、こういったことは少なくなるのではないか？と思ったかもしれません。それで、語り続けなさい、黙ってはいけないと言いました。旧約聖書にも、同じような体験をした預言者がいます。エレミヤです。語れば、とてつもない反対と迫害を受けました。それで黙ろうと思ったそうです。「エレ 20:9 私が、『主のことばは宣べ伝えない。もう御名によっては語らない』と思っても、主のことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて、燃えさかる火のようになり、私は内にしまっておくのに耐えられません。もうできません。」主が、この燃えさかる火のようなものをもって、エレミヤが語らざるを得なくさせたのです。

宣教会議で、何度となく聞いたことがあります。クリスチャンになった人の証しですが、実は、自分の近くにずっと前からクリスチャンの人がいたけれども、福音をその人たちは語らなかつたそうです。ずっと後になって、違う機会が与えられて、それで信じました。それで、「なんで、こんなすごい良い知らせを、もっと前に聞いていなかったのか！」と思ったという話です。そうです、私たちクリスチャンは、勝手に忖度しています。相手に福音を話しても、聞いてもらえないだろう…とか言って、忖度してしまいます。パウロもその誘惑があったのでしょ、だから、語り続けなさいと言われました。勝手に、語ってもだめだと決めつけるのではなく、語り続けなさい！ということですよ。

### 3B 「わたしが共にいる」

そして「<sup>10</sup> わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。」と言われます。主が、弟子たちに宣教命令で語られたことを思い出してください。「マタイ 28:19-20 ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」宣教命令を主が出された時に、その約束は、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」でした。主が共におられる、天と地におけるいっさいの権威が任された主が、私たちと共におられる！これは、すご

いことです。特に、世の終わりまでと主が言われているのは、世の終わりに近づくにつれて、困難になってくるからです。私たちは、信仰をもって「それでも、主はここにおられる」と知る必要がありますね。

主が共におられる、という言葉が出て来るところを見ると分かりますが、主がその人の味方になっておられる、あるいは、主がその人のために事を行ってくださるという意味合いがありますね。ヨセフが、牢屋に入れられた時に、「創世 39:21 しかし、主はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた。」主の恵みがあるということです。そしてダビデについては、「Iサム 18:14 主が彼とともにおられたので、ダビデは、行くところどこで勝利を収めた。」とあります。主が、彼のために戦ってくださっているということです。パウロが言いました、「ロマ 8:31 神が私たちの見方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」そして、イザヤが預言しました、「イザ 41:10 恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」恐れに対して、「わたしはあなたとともにいる。」と言われました。ですから、主がパウロに対して言われたのもそうです。恐れてはいけない、わたしはあなたとともにいる、ということです。

#### 4B 「わたしの民がたくさんいる」

最後に、「この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」とされています。ここで、主は、このような反対にも関わらず、ご自分の民をたくさん置いておられることを伝えられました。私たちの理解や感覚と、神のそれは大きく違うことがここで分かりますね。反対があれば、神の民は少ない。反対が少ないことは、神の民が多い印だと思ってしまう。

一昨日、ある記事を読みました。世界福音同盟の新しい総主事に対するインタビューですが、約六億人もいる福音派の信者の半数以上は、迫害下にいる人々です。迫害を受けているところで、クリスチャンが多くなり、そして興味深いのは次の発言です。「クリスチャンになることが簡単な国では、教会の成長はほとんど見られません。」えっ？逆でしょう？と思いますね。そうではありません、反対があるところに、広い門が開かれているのです。コリント人への手紙第一で、パウロはこう言っています。「16:9 実り多い働きをもたらす門が私のために広く開かれています、反対者も大勢います。」これは、広く開かれているので、反対者が大勢います、というような訳もできます。反対があるところに、門が広く開かれていて、実り多い働きをもたらすのです。

全く道徳がなっていない、乱れた町。それに、罵るばかりのユダヤ人。そんな姿を見たら、たくさんのわたしの民と言われても・・と思うかもしれません。私たちも、なかなか福音を信じない状況を見て、それで、「わたしの民はここにいるのだ」という声を聞き続ける必要があります！